

---

## 『長期経過からインプラント治療を再考する』

---

座長：近藤 尚知（岩手医科大学）  
梅原 一浩（東北・北海道支部）

近年、臨床教育にインプラント治療が入ったことで、術者が考える治療計画や考え方は、大きく変化している。例えば、遊離端欠損部の咬合支持を回復する症例や、中間欠損の両隣在歯が生活歯の症例であれば、インプラントが適応症の選択肢と考えるようになった。その結果、インプラント治療の目的は、「インプラント治療を成功させること（インプラント治療を長持ちさせること）」となり、インプラント周囲環境、外科術式、補綴条件に目が行きがちになっているように思える。しかし、その本質的な目的は、「長期的な口腔機能回復が得られるために、何を考えてインプラント治療を選択すべきかを考えること」が重要であると考えられる。

そこで今回は、インプラント治療の臨床経験の長いお二人の先生に登壇していただき、「長期経過から考えるべきこと」についてご講演していただく。一人目の中里先生からは「口腔外科医の視点」から、二人目の武田先生からは「補綴科医の視点」から、長期経過を行なった結果見えてきたこと、以前の考え方や視点が変わったことを中心に、それぞれの演者が現在大切にしていることについてご講演していただき、インプラントを適用した症例の長期的変化から、インプラント治療の効果と相反する本質的な目的と今後のインプラント治療に活かすべきことについて再考する。